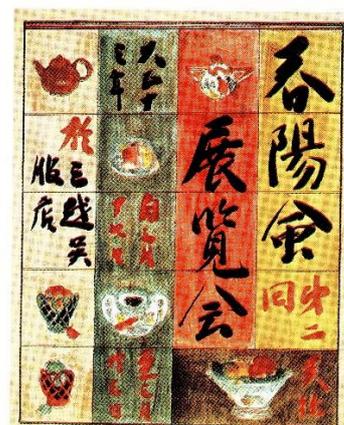


春陽会誕生 100 年

それぞれの闘い

岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ

2023.9.16(土)～11.12(日) 東京ステーションギャラリー



第2回春陽展 ポスター

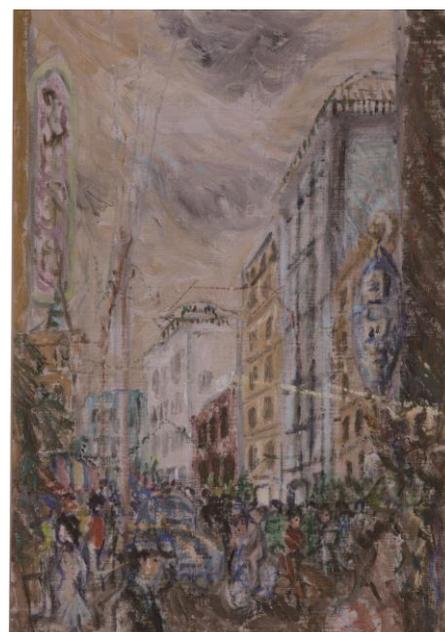


第1回春陽展 展覧会場

1922年、再興院展洋画部から脱退した小杉未醒、山本鼎、森田恒友、長谷川昇らと、草土社の岸田劉生らを中心としたメンバーによる、画家の志向を尊重し自由な活動を許容する団体、春陽会が発足しました。各人主義をうたい、知名度の高い花形作家を揃えた第1回展は、油彩、水墨画、素描などが同一の壁に展示されるなど、その宣言どおり「芸術は形式で差別されない」ものでした。そして、第1回展は注目されて大成功をおさめ、春陽会は洋画界を代表する第3の団体として認知されます。形式に左右されず、大衆に訴えかけようという自由さが、油彩だけでなく、素描、挿画、版画などの展示へとつながりました。

春陽会では、西洋の最先端の美術動向に眼を光らせてこれを紹介するとともに、自らの内面にある風土的ないし土着的なもの、日本ひいては東洋的なものを表現することを意識する画家が続出しました。また、画材や美醜にこだわらず、己に立脚した個性をどう表出するかということにも葛藤しました。こうした、芸術の高みへと向かおうとする作家各々の表現の方向性を軸に、春陽会展では数々の傑作が発表されました。また、発足から戦前にかけては大衆と結びつく傾向もありました。自宅にかけやすい大きさの作品を発表し、絵画を学ぶ場としての春陽会研究所を運営し、新聞挿画室を設けるなどといった活動は、画家たちの活動を認知させ、次世代につなぐ試みであったと位置づけることもできます。

知名度のある作家が寄りあうようにして成立した春陽会が、時代と連動しつつ、他の団体とどう違う展開をとげて、今に続く足場を築いたのでしょうか。本展では、春陽会の創立から1950年代までの春陽展出品作を含めた代表作など約100点を紹介する予定です。



木村莊八《銀座みゆき通り》1958年
東京ステーションギャラリー



小杉放菴《松下人》1935年 栃木県立美術館

開催要項（予定）

【展覧会名】

春陽会誕生 100 年
それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ

【会期】 2023 年 9 月 16 日(土)～11 月 12 日(日)

【会場】 東京ステーションギャラリー

【主催】 東京ステーションギャラリー(公益財団法人東日本鉄道文化財団)

【共催】 一般社団法人 春陽会

会場構成

第 1 章 始動:第 3 の洋画団体誕生(第 4 回展まで)

小杉放菴、梅原龍三郎、岸田劉生、三岸好太郎ら

第 2 章 展開:日本へのこだわりと滞欧・帰朝作家の発信

森田恒友、足立源一郎、萬鉄五郎、林俊衛ら

第 3 章 独創:不穩のなかで(1934 年以降)

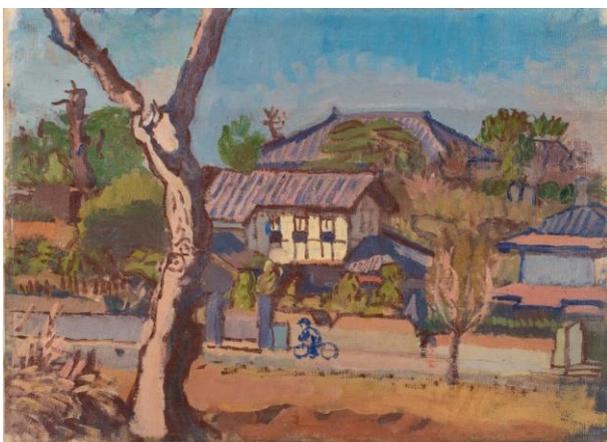
石井鶴三、木村荘八、長谷川潔、鳥海青児ら

第 4 章 展望:3 巨匠と新たな流れ

駒井哲郎、岡鹿之助、中川一政ら



発会当日の記念写真、岸田劉生、中川一政、木村荘八、梅原龍三郎ほか



小林徳三郎《郊外風景》1926年 東京ステーションギャラリー



河野通勢《琴棋書画之図》1923年
碧南市藤井達吉現代美術館



岸田劉生《童女飾髪之図》1921年
碧南市藤井達吉現代美術館



木村荘八《河岸夜(明治一代女)》1936年頃 東京ステーションギャラリー

東京ステーション
ギャラリー

広報に関するお問い合わせ
東京ステーションギャラリー
☎ 03-3212-2763